

## 保育者の実践的指導力育成・向上に関する研究

### —遊びの後の片付けの指導—

横井 志保\* 野田 美樹\*\* 村岡 眞澄\*\*\*

#### 研究目的

筆者らは、保育者の実践的指導力の育成・向上を目的として、キャリアが感じられる保育から学ぶという方法を用いて研究を進めている<sup>1) 2)</sup>。その結果、「子どもの心に寄り添いながら、子ども自らの取り組みを大切にす」保育が、キャリアが感じられる保育の重要な構成要因であり、それが保育者の動きや所作の特徴<sup>注1)</sup>を生み出していることを明らかにした。今後さらに色々な場面での分析を通して、「子どもの心に寄り添いながら、子ども自らの取り組みを大切にす」保育の特徴を明らかにして実践的指導力の育成・向上につなげたいと考える。今回取り上げた指導の場面は、とりわけ実習生や新任・初任の保育者が指導面での悩みとしてよく取り上げ、かなり指導が難しいと感じている‘片付け’である。片付けは、現職の研究会などで繰り返し協議のテーマとして取り上げられており、若い保育者だけの問題ではない<sup>3)</sup>。

片付けについての研究を概観すると、片付け行動の年齢的な違いと保育者の指導との関連を明らかにしたものや<sup>4) 5)</sup>、自律性や社会性を育てるといった発達の意味に注目し自律性を尊重した指導の必要性を指摘しているもの<sup>6) 7)</sup>、また啓蒙的に家庭での片付けの具体的な指導方法について述べたものもある<sup>8) 9) 10)</sup>。園での片付けの具体的な指導の方法に関しては、加藤らが<sup>11)</sup>、子ども一人一人の遊びの充実を図るために生活全般を見直す中で、片付けも自分からできるようになった実践を紹介している。この研究については筆者らの研究に示唆するものが多いが、研究の結論の根拠となるデータが若干不足しているように思われる。

この他に保育計画の中で片付けがどのように取り上げられていたかを歴史的に概観した研究もある<sup>12)</sup>。片川もまた、片付けが保育の中でどのように位置づけられていたのかについての歴史的な変遷について述べ、園での片付けの指導にみられる違いは保育における位置づけや意味づけの違いに起因するものであるとしている<sup>13)</sup>。片川の指摘は、指導のあり方を問うに先立って重要であるものの、具体的な指導のあり方については言及されていないことから、今後保育における位置づけや意味づけを意識しながら指導のあり方を探る研究を積み重ねることが必要と思われる。

本研究は以上のような研究の経緯を背景として追究されるものであり、子どもが自ら片付けようと意識して取り組むことができるようにすることが大切であるという認識を基底にして、子どもが自ら片付けへと向かう事例と、保育者の片付けさせようという意識が先行していると思われる事例を比較分析し、これまであまり取り上げられていない保育者との信頼関係や心のつながりの視点から片付けの指導のあり方を探りたい。

---

\* 名古屋柳城短期大学

\*\* 岡崎市立梅園幼稚園

\*\*\* 東海学園大学

## 研究方法

### 1. 保育観察および研究者自身の保育事例による分析

遊びから片付けへの移行場面を中心とした観察記録および実践事例の記録に基づいて研究者らで協議し、子どもが自ら片付けようと意識して取り組んでいると思われる事例と、どちらかといえば保育者の片付けさせようという意識が先行していると思われる数事例を比較分析する。

2. 期間：観察期間は2003年9月～11月 実践期間は2007年4月～2009年1月

3. 対象：愛知県N市立幼稚園・O市立幼稚園・大学附属幼稚園

## 結果と考察

保育観察および研究者自身の保育事例の中から、子ども自らが片付けようとしている姿がより特徴的に認められると判断されたのが次の事例1～3である。

### 事例1－(1) 3歳児 7月

ままごとの風呂敷が全部床に広がっていた。ブロックもカゴがひっくり返され、部屋がおもちゃでいっぱいだった。①保育者が「わあ、お部屋が大変。先生、みんなが遊べるようにしなくっちゃ」と、片付け始めると、いつものように②Aが「私もやってあげる」と言った。保育者は片付けをしない子どもの心にもノックしたかったので③「こんなにたくさん先生だけじゃできない」と、困った顔をして見せた。すると周りの子どもではなく、Aが「いいよ、先生はやらなくて。Aが全部一人でやる」と言った。「じゃあ先生は？」と、保育者が聞くと「見てて」とAは言い、風呂敷を1枚1枚丁寧にたたみ、片付けていた。④保育者は「やっぱりAちゃんだけじゃ大変だし、みんなの桃組だから先生もやるね」と、カゴにブロックを入れ始めると、いつも片付けをしないTやMが来て、一緒にブロックを入れ始めた。「T君もM君も手伝ってくれるの？みんな大好きな桃組のお部屋をきれいにしようね。ありがとう。」と保育者が声をかけると嬉しそうに片付けを続けていた。

いつも片付けの手伝いをしてくれるRの母親に保育者が、降園時間にRがいつも手伝いをしてくれて助かっている話をした。すると後日、母親が以下のような話を保育者に聞かせてくれた。

### 事例1－(2) 3歳児 7月

母親が「Rはいつもお手伝いしてるの？」と尋ねると、R「うん」。「えらいねえ。」と、母親。「でも、先生、疲れなのかなあ。」とR。また母親が「どうして？」と尋ねると、「先生ってお片付けの時、すごいスピードなんだよ。ブロックなんて手にいっぱいもっちゃうし、ままごともぜんぶ、ぜんぶ、ぜ～んぶ片付けちゃうんだよ。疲れちゃうよ。」とR。母親が「それでR 手伝ってあげるの？」と聞くとRは「だって、先生、大変だもん。」と、答えた。

母親が「子どもって先生のことよく見ているんですね。」と笑いながら教えてくれた。

3歳児は入園当初、「片付け」の意味さえわからなかったり、「片付け」は大人がするものという意識を持った子どももいる。反対に片付けるということはわかっている、家庭で「片付け」を強要されている子どもは、「片付け」は嫌なことと捉えていたり、「片付けなさい」と、言われなければならない、といった姿となって表れることもある。

5月を過ぎると、保育者と子どものつながり（関係）ができてくるので、保育者の一生懸命に片付

ける姿を見て、大好きな先生を手伝いたい、また、一緒にしようとする子どもが増えてくる。保育者が「〇〇ちゃんありがとう、先生助かるよ。」と、言葉をかけるとますます張り切って片付けを手伝ったり、それを見て周りの子どもも保育者の手伝いをするようになる。

入園当初、片付けの意味もわからなかった子どもたちも、保育者が一生懸命片付ける姿を見せたり、子どもたちの心に働きかけるような言葉掛けをすることによって、自ら進んで片付けようとしたり、大好きな先生を手伝いたいという気持ちを持つようになる。(点線①②③) また、保育者の「みんな大好きな桃組のお部屋をきれいにしようね。」等という言葉掛けは、子どもに代わって言語化することでクラスへの愛着を確認させ、自分たちの好きなものをきれいにしたいという気持ちを育て、それが片付けにつながっている。(波線①)

## 事例2 3歳児 1月

保育者が室内に戻ると、ぼぼちゃん(人形)が裸で床に落ちていた。保育者は、始めは気付かないふりをして「先生外でフラフラしてきたよ。みんな何してるの?」と聞くと、子どもたちは「パーティーだよ」「明日はG君の誕生日なの」と答えた。みんな保育者の方を見たので、少し大げさに「わあ、ぼぼちゃんこんな所で裸んぼうで寝てたら背中が冷たかったね。」と、ままごとコーナーから布団を持って来て床に敷き、ぼぼちゃんを寝かせて布団をかけ、「これなら風邪をひかないから大丈夫」と人形のぼぼちゃんに向かい笑って見せ、「それでパーティーのごちそうは?」と聞いた。すると「ケーキだよ」と答えた。ケーキが皿に並べられていた。「美味しそうにお皿に並んでいるね」と言いながら、他の食べ物が床にたくさん転がっていたので拾ってカゴに入れた。「パーティーのお料理できるようにカゴに入れておくね」と言うと、子どもたちはうなずいていた。

翌日、食事の後、昨日と同じメンバーでままごと遊びが始まっていた。戸外へ行きたい子どもが多くいたので、「先生お外に行って来るね。用事があったら呼んでね」と言って保育者は外へ出た。時々部屋をのぞきながらも特に部屋には戻らなかった。途中で他のクラスの先生が部屋に入って子どもたちと何か話しをしていた。後からその先生に聞くと「ぼぼちゃんが風邪をひいちゃったからベッドに寝かせてる」と話をしていらした。

戸外の片付けをして部屋に戻ると、ままごとコーナーでぼぼちゃんがベッドに寝ていたので、「わあ、ぼぼちゃん今日は気持ち良さそう」と声をかけると、Yが「私が寝かせてあげたんだよ。あったかいよ」と言った。「ありがとうYちゃん。ぼぼちゃん嬉しそうだね」と言うと、Yも嬉しそうに笑った。③「じゃあぼぼちゃんがゆっくり眠れるようにお部屋を片付けるね」と保育者が言うと、Yも一緒に片付けた。

3学期になると保育者が側に居なくても子どもたちは思い思いの場所で遊ぶようになる。保育者が戸外にいても、室内のままごとコーナーで子ども同士の遊びが盛り上がるが、ままごとの人形やごちそうが部屋に転がっていても気にせず遊ぶ姿も見られる。保育者は人形やごちそうを大切に扱って欲しいと願っていたが、裸のまま直に床に転がされている人形を見ても、その場で直接子どもに片付けるよう促さず、床に散らばっているおもちゃのごちそうも、「パーティーのお料理できるようにカゴに入れておくね」と言い、保育者自らが片付ける姿を見せている。(点線①②) また、人形を大切にしたいという願いがあっても、直接口に出して言わずに布団に人形を寝かせ「大丈夫」と微笑みながら話しかけるという行為で伝えようとしている。それが子どもの心を揺り動かしたのか、翌日Yは人形を布団に寝かせ、人形が風邪をひいてしまったので布団に寝かせたと他のクラスの先生

に話している。前日に裸のまま床にほっておいてかわいそうだったという気持ちからとった行動と思われる。大好きな担任の先生との心と心の通い合いが、人形を布団に寝かせ大切に扱うYの姿を生じさせており、その後の片付けも、自然と保育者と一緒にすることができたのだろう。(波線①②③)

とりわけ3歳児においては、保育者との信頼関係の中でその必要性をいわゆる“感覚でわかる”ことや“体で学ぶ”ことが大切である。

### 事例3 4歳児 9月

給食後、食器などをのせたワゴンを返すまでは室内遊びをする。その後、戸外と室内で好きな遊びをするが、そのまま室内で遊ぶ子どももいるので、中には要領がいいのか片付けをしないで戸外へ出て行ってしまふ子どももいる。その場合、引き続き室内で遊ぶ子どもが、先に戸外へ行った子の分も片付けなければならない。保育者は部屋に残った子どもと①一緒に片付けながら、「Aちゃんいつもお片付けがたくさんになっちゃうね」と言うと、始めAは「いいよ、まだ部屋に居たかったから」と言っていた。しかし、そのうちHがいつも自分が使っていた物も片付けずに出て行ってしまふようになった、ある日の給食後。Aが遊んでいる廃材コーナーに②Hが「入れて」と入ろうとするとAが「H君はダメ」と言った。一緒に遊んでいたIも「H君はダメ。入っちゃダメ」と言った。Hが「先生、AちゃんとIちゃんが入れてくれん」と言いにくると、AとIは口をそろえて③「だってH君、いつも片付けしないもん」と言った。④保育者が「そうか、AちゃんとIちゃんいつも部屋の片付けしてくれてたもんね」と言うとHは、しまった、という表情をした。保育者が「H君、AちゃんとIちゃん、いつもH君が外に行った後にH君の分も片付けてくれたんだよ。」と言うと、Hは二人の顔を見た。⑤少しするとHは、「ごめんね」と言った。保育者は「H君も外に行きたくなったら使ってた物は片付けたり、まだ使う?とか聞いたらいいよ。」と言うと深くうなずいた。

⑥その日からHは室内遊びを楽しんだ後はきちんと片付けて、気持ち良さそうに飛び出して行った。

3歳児は保育者とのかかわりが中心となっていたが、4歳児は他児の存在を認識するようになる。その中で、友達の行動を見て感じ取ったり、思いに気付くなど、友達とのかかわりを通して心が動くことも多い。

Aは始め、他児の遊んだ後の片付けにも抵抗が無く、むしろ保育者と共に行うことを楽しんでいるかのようなであった。(波線①) しかし、いつも片付けずに出て行ってしまふHが、「入れて」と来ても仲間には入れようとしなかった。直接、片付けるようには言わなかったものの、Hと一緒に遊べば、またHの分まで片付ける事になると思い、仲間に入れるのを拒んだのだ。(下線①) Hはこの時まだAの気持ちに気付く事ができなかった。そして保育者にHが、Aが仲間に入れてくれないと訴えたことで、初めてAは自分の気持ちを口にした。(下線②) Hは自分がいつも片付けずに仲間に入れてもらえないとわかり、初めてAの気持ちに気付く事になった。また、その時のHの表情から、片付けなければならないことはわかっていたが、誰にもとがめられずにいたので、なんとなくそのまま次の遊びに移っていたが、やはりいけなかったと感じていることが読みとれる。(二重波線①) そして更に保育者からAとIが自分の遊んだ後片付けをしていてくれたと聞かされ、自分が悪かったと素直に謝ることができた。(二重波線②) Hはこの件以降、自ら片付けるようになった。そして、外に行く様子からもわかるように、片付ける事は気持ち良いと感じているようだ。(波線②) 保育者から注意を受けたり、無理に片付けさせられたりしなかったことと、友達とのやりとりから片付けの大

切さが認識されたことで、Hの心の中にはしっかりと‘片付け’が意識され、遊びと片付けがセットとして考えられるようになったからだといえよう。

次に違いを明確にするために、どちらかといえば保育者の片付けさせようという意識が際立っているとされる事例を示したのが事例4、5である。

#### 事例4 4歳児 11月

A男積み木で遊び始める。A男とあまり関わりがなかったS太も、積み木遊びに入って一緒に遊んでいた。部屋で遊んでいる子どもたちに保育者は「お外に行って来るね。また戻ってくるから」と言い、園庭に出て行った。

およそ15分ほど経って保育者が「ただいま」と保育室に戻った。

A男は積み木遊びをやめて製作コーナーで絵を描き始めた。画用紙2枚を横につなげて長いバスの絵を描いていた。保育者は子どもたちが製作コーナーに集まっているのを見て、製作コーナーへ行った。①A男は戻ってきた保育者にバスの絵を見せながら「長いよ、大型バスだよ」と言うが、②保育者はA男の絵をチラッと見るだけで、この日はいつもより帰る時間が早く、急いで片付けをしないといけないという気持ちが先行しているのか、そっけない感じの対応であった。保育者の反応があまりないので、A男は隣にいるK介に「K君見て！大型バスに乗ってるよ。いろんなところが見えるといいな」と言い、描いたバスの絵をハサミで切り始めた。③保育者は「A君、ハサミ元へ戻しておいてね」と言うと、A男は全部切った後、ポトンとハサミを落とした。

少し経って保育者が「お片付け」「閉店します」と言うと、④子どもたちは口々に「嫌だー」と言ったが、保育者は部屋の中を片付け始めた。⑤A男は保育者の言葉も聞こえない感じでつなげたバスに人が乗ってるように描く。⑥積み木で遊んでいた子どもたちも皆、製作コーナーに来た。⑦A男、絵を保育者に見せながら「こんな大きいのできたよ」と言ったが、⑧保育者はあまり反応せず、誰に向かってという訳でもなく⑨「スピードアップだよ」と言ったが、⑩子どもたちは全く片付ける気配がない。「片付けどうなった？」と言いながら、C郎が積み木で作っていた自動車の道路を壊したくないと言うのを振り切って片付けようとする、C郎「だったら絵に描いとく」と、画用紙に描き始めた。すると保育者は「C君、また作ればいいから。また作れるから」と、早く片付けさせたい様子。⑪無理に片付けようとする保育者に⑫C郎は「今、描いてる！」と、強い口調で言った。保育者が積み木を片付け始めると、積み木で遊んでいない子どもたちが片付け始めた。

⑬バスの絵を描いていたA男は、他の子どもたちが片付けるのを見ても無視して製作コーナーで絵を描き続けていた。

C郎は絵に描いて残すと言いつつ、描こうとするが、難しく描けずにいた。そこに⑭保育者が「C君片付けるよ」と言うと、⑮C郎は半分泣きながら、保育者にくっつくように「描いてるったら！」と言った。⑯保育者はどうしていいかわからない風でC郎の身体に手を置いて「また作れるから、今日はお片付けね」と言ったが、C郎は泣いて怒っていた。不満気な様子であったが、しぶしぶ保育者に従い、結局、積み木を全部片付けた。

A男は外から戻った保育者に、画用紙を2枚もつないで描いている、長くて立派な大型バスを見せたかった。そして、その大きさを見て保育者に驚いたり、認めて欲しいと思っていたのだ。しかし、保育者の意識は既に片付けに向いており、A男の思いを受け止めるどころか、見ることもしなかつ



た。(波線①②・点線①②③) そして保育者が「お片付け」「閉店します」と言っているにもかかわらず、その声を無視するかのよう、更に絵を描き続け、ついには他の子どもたちが片付けるのを見ても最後まで絵を描くのをやめなかった。A男が初めに保育者に絵を見せても認めてもらえなかったことは、A男にとって、とても空しく、満足感や充実感を得るためには自分の納得するまで絵を描くことしかなかったのであろう。それゆえ活動のきりをつけることがいつまでもできずにいた。(二重下線②⑤)

また、子どもの様子に関係なく、保育者が一方的に「お片付け」にしたので、口々に「嫌だー」と言い、更に場所を移動して遊びを続けようとしている。(二重下線①③) 子どもの中に「きり」をつけなければいけないという意識がないことがわかる。(二重下線①②③④⑤)

そんな中、C郎は少し強引な保育者にしぶしぶ従い、片付けるために積み木で作った道路を絵に描いて残そうとするが、ここでも保育者はC郎の行為を認めることなく、片付けだけに意識が向いている。(点線④⑤⑥⑦) その苛立ちがC郎の強い口調となって表れている。(波線③④)

#### 事例5 4歳児 11月

A男が保育者に「先生、粘土ない」と言いに来ると保育者は「粘土ないの?」と言い粘土コーナーへ行き、麺棒で粘土をたたいて形を整える。B男は麺棒でたたくことをおもしろがっている。机も思い切りたたいてしまう。すると保育者は「B君、B君それはたたいてちゃダメだよ」と言い、机の上のバットを粘土板に換え、①保育室を出て行く。

①子どもたちは「あれ?先生は?」「あれ?先生は?せんせーい」「先生どこだ?遊戯室?」と、口々に言いながら粘土コーナー、製作コーナーで遊んでいた子らが保育者を探した。

5分ほど経って②保育者は戻るとすぐに「そろそろお片付けしようか」「Hちゃん、そろそろお片付けするよ～」と言った。しかし、③子どもたちは遊び続けていた。粘土コーナーに保育者が来て「先生片付けるからBちゃん、ここピカピカにしてくれる?」とBにその場の片付けを頼んだ。

保育者が木製積み木コーナーへ行き、片付け始めると男児2人、女児2人も一緒に片付けた。遊び続けるB男に向かってD子が「お片付けだよ」と声をかけると片付け始めた。その後、④再び保育者は保育室を出て行った。

保育者が戻り、「S君、お片付けするよー」と言うと、製作・絵描きコーナーを片付け始め、子どもたちは椅子を片付け始めた。粘土コーナー以外のコーナーはほぼ片付くが、⑤5人の子が粘土遊びをまだしていた。子ども用ほうきが8本くらい入っているゴミ箱を保育室の中央に置き、「ゴミ集めてくださいー」と、大きな声で全体に声をかけると、その5分後位には大体の片付けが終わった。

保育者が子どもたちに黙って出て行ってしまふので、子どもたちは遊んでいる途中で保育者を探している。(点線①③・波線①) 保育者が落ち着かないので、子どもたちはなかなか落ち着いて遊ぶことができずにいた。また、保育者は保育室に戻るとすぐに片付けを子どもたちに告げ、それまでの遊びの様子を気にすることもなく、その後は一方的に片付けることだけを子どもたちに要求する。満足感を得られなかった一部の子どもたちは、保育者の言葉にも耳を傾けることなく遊び続けている。(二重下線①②)

この2つの事例に特徴的に表れているように、保育者は片付けをさせたいという意識が先行して子どもに心に向けることができないでいるため、保育者の片付けたいという気持ちが子ども達に伝わら

ず、空回りしてしまう結果となっている。保育者は子どもたちの遊びの楽しさを理解しようとしたり、楽しさをわかって欲しい子どもの気持ちを受け止めることができず、保育者と子どもの意識には常にズレが生じている。

## まとめ

子どもが自ら片付けようと意識して取り組むことができるようにすることが大切であるという認識を基底にして、子どもが自ら片付けへと向かう事例と、保育者の片付けさせようという意識が先行していると思われる事例を比較分析して、これまであまり取り上げられていない保育者との信頼関係や心のつながりの視点から指導のあり方を追求した。その結果次のようなことが示唆された。

- ① 片付けは片付けの時間として切り離されたものではなく、片付けが始まるまで取り組んでいた遊びの楽しさを理解したり、楽しい気持ちに区切りをつけないと子どもが残念な気持ちに共感するなど片付けの前や後の活動とも関連し、また日々の積み重ねの上に成り立つものである。
- ② 子どもとの信頼関係が重要である。保育者が片付けの行動にではなく子どもの心に目を向けることで、保育者の願いが子どもの心に伝わり、自ら片付けようとする気持ちが育つ。
- ③ 3歳児の時に片付けの必要性を、事例2にも示したようにいわゆる“感覚でわかる”ことや“体で学ぶ”ことが大切である。これを土台にして事例3のHのように、4歳児では友達とのやりとりから片付けの大切さが認識され、遊びと片付けがセットとして考えられるようになる。

この結果を元にして指導する上で大切に思われるものを示したのが次の5点である。

### (1) 保育者との関係

「先生に何かを頼まれるとうれしい。」または、「先生と一緒に何かをしたい。」と、子どもが思うような関係を築いておくこと。

### (2) 片付けを遊びの延長上に捉える

保育者と遊びの楽しさを共有することで、子どもは遊びの満足感が得られ、気持ちを片付けに向けることができる。

### (3) 一人一人の把握

保育者は一人一人の子どもが、どこでどんな遊びをしているのかを把握し、遊びの状況や展開を知っておくこと。

### (4) 一人一人に寄り添う

片付けるためのhow toやマニュアルは存在しない。保育者が一人一人の子どもに焦点を合わせ、じっくりと向き合うこと。

### (5) 子どもが必要感をも持つ

子どもがクラスやおもちゃに愛着を持ち、「ここをきれいにしたい。」または、使ったものを「きれいに片付けておきたい。」という気持ちを持つことができるようにすること。そのためには、保育者や友達との心のつながり、活動相互のつながり、生活全体とのつながりをみていくことが大切である。

本研究において、子ども自らが片付けへと向かうことにおいて、保育者と子どもとの関係の重要性を指摘したが、子どもの心に目が向けられれば当然、片付けやすい環境や用具の工夫、あるいは仲間

との関わりなどについても言及されることが必要となるであろう。今後の課題としたい。

<注>

- 1) キャリアが感じられる保育に共通してみられる身体の動きや所作の特徴は以下の「親密さ（心理的距離の近さ）」「とっさの対応力」「ゆったりとしながら軽快」「待つ姿勢（自立を促す）」「柔軟性」の5点である。

<引用・参考文献>

- 1) 岩田幸子、中谷奈津子、横井志保、渡辺 桜、村岡眞澄 保育としての身体技法の育成に関する研究 — 「あやす」「なだめる」技法を手がかりに — 愛知教育大学幼児教育研究 第11号 PP.1-8 2005
- 2) 岩田幸子、横井志保、渡辺 桜、村岡眞澄 保育者の実践的指導力育成・向上に関する研究 (3) — 食事の場面で — 愛知教育大学幼児教育研究 第12号 PP.41-45 2005
- 3) 名古屋市立幼稚園教育研究会 研究集録 平成7年度、12年度、13年度
- 4) 志賀美和、中村泰子 かたづけに関する一考察 愛知教育大学卒業研究 1997
- 5) 羽山奈緒美 園における4歳児のかたづけについて 愛知教育大学卒業研究 2004
- 6) 藤原元一・桂子・江里子 やさしい解説 モンテッソーリ教育 P.36 2007
- 7) 大伴栄子 ピアジェション・スクールⅦ — 幼稚園における片づけ活動の検討 — 日本保育学会第43回大会 PP.104-105 1990
- 8) 牧野由美子 自己コントロール力とだらしなさ 児童心理 51-2 1997
- 9) グループこんべいと 怒らないしつけのコツ 学陽書房 2008
- 10) 安武智里 幼稚園の立場からのしつけの問い直し—幼児期の基本的生活習慣の形成という観点から— 教育と医学 36-1 1988
- 11) 加藤和成他 片付けをきっかけに子どもの幼稚園生活を見直す試み 第56回日本保育学会発表論文集 PP.218-219 2003
- 12) 宍戸健夫・村上祐一編 保育計画の考え方・作り方 第一章 幼児の保育計画と実践① あゆみ出版 1991
- 13) 片川智子 “片づけ”の捉え方をめぐる一考察 保育の実践と研究 8-4 スペース新社保育研究室 2004